海外新設校における学校創り（深圳日本人学校　はじめの一歩）

── 現地教育事情を踏まえ，地域に必要とされる学校を目指して ──

児童生徒・保護者の案を
もとにしてつくられた校章

前深圳日本人学校　校長
千葉県千葉市立美浜打瀬小学校　校長　三　浦　信　宏

キーワード：海外新設校，深圳日本人学校，現地理解，特色ある教育活動，学校創りとシステム

１．はじめに

深圳日本人学校は，平成20年４月に中国国内で13番目，世界で88番目の日本人学校として開校した。深圳市は30年前，人口わずか３万人の漁村だったが，経済特区に指定されたことで，現在では人口1200万人，広さは東京都くらいの大きさがあり，中国有数の大都市である。気候は亜熱帯に属し，１月でも気温は10度を下回らず，10月頃までは夏のような暑さが続く。南国の花々・フルーツが豊富で，街路樹にマンゴーがなっている。この深圳には日本人が約4000人住んでいると言われ，これまで補習校はあったが，日本人子女が安心して学べる場をと，商工会・政府・準備委員会の皆様のご尽力で開校することができた。開校時，児童生徒数36名教職員17名（教員12名）でのスタートだった。２年目には85名，３年目には145名と順調に児童生徒数は増加した。何もないところから始めた３年間の学校創りの様子を報告する。

２．学校創り

(1) 赴任前の準備

① 事務局長と面談

12月はじめ文科省→県教委→市教委→学校という順序で，赴任先が決まった。その翌日には深圳日本人学校開校準備委員会事務局長（開校後の事務局長）から電話があった。１週間後来日し，施設・設備・備品等について，現任校（千葉市立瑞穂小）の様子を見学するとともに，施設設備・教育課程等について意見を求められた。備品等が日本からの輸入で時間がかかるため，12月中には施設・設備・購入物品を決定しなければならず，現任校の教科主任等の協力を得て，小中全教科領域等の備品購入計画を提出した。その後もメール・電話・FAXで着任まで連絡を取り合った。ちなみにその時点では校長以外の派遣職員は誰１人決定しておらず，準備を１人で進めた。

② 講師採用

開校年度の文科省派遣教員は私を含めて６名。小１から中２まで，複式ではなく，各学年単式で進めるには，６名の講師が必要であり，海外子女教育振興財団の専任教員（講師）の面接リストを一晩で作成した。ちなみに面接は内定者研修会と同時開催であったので，面接を優先して行った。

③ 教育課程づくり

文科省派遣教員が決定したのが12月末。教頭は未配置，他の５名も教務主任経験なしという状況で４月当初からスタートが切れるように教育課程の編成を校長自身で行った。中国地区の日本人学校のホームページをもとに深圳独自のものを作成した。まず二学期か三学期制かを決めた。続いて学期をいつからいつまでにするか，祝日はどうするか，行事はどうするか，持ち時間はどうするか等々，小中の教育課程の編成作業は，児童生徒の実態もわからず苦労をしたが，他の５名の教員と連絡を取り合いながら進めた。これまでに日本でも２校新設校を経験したが，教育委員会がないことは，本当にすべてが一からの準備であった。

④ 下見

地域の実態，施設の状況もよくわからないことから，文科省・市教委・現地事務局と相談をし，１月に現地下

見を行った。改築途中の校舎見学・広州日本人学校見学，商工会訪問，そしてアパート探しを４日間の日程で行った。他の教員にも参考になるようにビデオ撮影を行い，内定者研修会の際に視聴をした。

(2) ３年間の学校創りのキーワード

○　開校１年目【学校の基礎を創ろう】

第１回の職員会議で，事前に作成した教育課程を中心に共通理解を図る。何もないところからのスタートであることから，「まず，やってみる」「ベストではなくて，ベターを求めて」「修正・改善は随時」という考えで１学期を乗り切ることにした。何もないこと・前例がないことはデメリットではなく，「子どもたちのために何でもできる」というメリットであるというプラス思考で考えることとした。

○　開校２年目【学校の基礎を充実させよう】

職員の努力のおかげで，学校行事や交流活動等，１年間でおおまかな形ができあがってきた。２年目は，見通しもつくことから，さらに充実を図っていくことを確認した。また職員会議での提案事項は，その行事等が終了後，すぐに次年度の計画を立てるようにし，３月末には次年度の職員会議提案資料（学校教育計画）を完成させることができた。

○　開校３年目【学校の基礎を確立しよう】

教員14名中９名が帰任となることから，新たなことに着手するのではなく，これまでの実践を見直し，次年度以降に確実に引き継げるよう，基礎の確立と銘打ちそれぞれの活動を行った。

(3) 現地理解と交流活動

① 現地校視察

現地理解・現地交流を行うために，まず現地校を訪問することから始めた。現地理解としては市および区の教育局の協力を得て，学校訪問・学校間交流を中心に行ってきた。現地教育局副局長が日本留学の経験があり，親日家であるとともに，私が所属する研究会（全国個性化教育研究連携）の大学教授と知り合いであったことがきっかけで，訪問校・交流校等を紹介してくださった。２年目の春休み（現地は９月始まりで，学校は通常授業中）に全教職員で，現地小学校・中学校を訪問し授業参観を行った。

② 交流活動および現地体験活動

多くの学校を見ること・交流することで現地の教育現状を理解できるようになると共に，本校の教育活動への取り込みを行い，児童生徒が交流できる基盤を創ることができた。３年間の主な交流活動は次のようなものである。

外国語学校との交流（運動会）

・小学部１・２年…現地校の育才３小と遊び交流
・小学部３・４年…育才３小とのスポーツ交流・４年のみ元平特殊教育学校との交流
・小学部５・６年…外国語学校との交流（運動会招待）・修学旅行での中国語インタビュー
・中学部　　…学府中学校と合同日系工場見学・スポーツ交流
　　外国語学校（日本語学科）生徒との交流・３年目はホームスティを実施

普段の教育実践はもとより，交流活動・体験活動の充実を目指し，多くの実践ができる基盤を作り上げてきた。これは市・区教育局の理解・協力，現地校の理解・協力，地元日系企業の理解・協力なしには進めることはできなかった。その結果として協力校９校，交流校５校を得ることができた。交流内容も年々改善を重ね，最終年度は日中の政治的な問題も発生したが，深圳外国語学校とはホームスティができる関係にまでなった。また体験活動を充実し，開校２年目から実践し始めた中学部２年の職場体験学習も３日間のプログラムを実施できるように

なった。街探検・お店見学・工場見学・修学旅行・宿泊体験学習・校外学習も場所・内容ともに試行錯誤の連続であったが，大まかな形はできてきた。

(4) 研究と学校創りの一体化　　※　実践に役立つ研究・研修を目指して

研究と学校創りを一体化させることを考えて研究実践を行ってきた。1年目の夏休みまでは，テーマを決めたり話し合ったりする時間をとることができなかった。教員構成を見たときに若手（未経験者）が多いことから，テーマ研究ではなくそれぞれが研究授業を好きな教科で行うこととし，職員，特に若手が授業を見る機会を多くとるようにした。またチーム発想法を導入し，「よりよい学校にするには」のテーマのもと，ぞれぞれの思いを出し合う場を設定した。出身県が違うことでいろいろなアイディアが出され，それぞれの視野を広げることができた。

2年目は地域・学校・児童生徒の実態をもとに，テーマを「異文化を理解し　進んで探求する　児童生徒の育成」とし，副題を「―生活科・総合的な学習の時間の単元開発を通して―」と設定して研究を進めた。単元開発をすることは，本校独自のカリキュラムを作成する上で必要不可欠であった。各学年とも交流を意識し，ここ深圳ならではの単元開発に取り組んだ。実践をもとに内容・方法の修正を行い，それを次年度の年間指導計画（カリキュラム）としていった。交流校も増え，交流活動も地域の協力のもと有意義な活動が行われた。

3年目は，同じテーマ・副題で研究を進めたが，さらに副読本づくりも研究内容とした。全教員で分担をし，夏休みを中心に資料収集を行い，3月には初版を完成させることができた（A4版カラー65ページ）。深圳市について知っているようで知らないことが多くあり，編集作業は大きな負担であったが，副読本作成は教師自身が地域を知るきっかけとなったことや，児童生徒への貴重な資料が作成されたことなど大変有意義な研修となった。学校自体に歴史と伝統ができると，テーマを絞った深い研究を進めることができるが，新設校，歴史の浅い学校では，学校づくりと研究を関連させ，取り組んでいくことが大変効果的であることがわかった。副読本づくりは千葉市の社会科副読本や広州日本人学校のものを参考にした。

(5) 特色ある教育活動

特色ある教育活動としては本校のカリキュラムづくりと並行しながら開拓を進めていった。主なものは次のようなものがある。

○　縦割り活動（フレンズ活動）…開校時，子ども同士のつながりを意図的に作り，仲間意識を育てることを目的にして縦割り活動を実施した。遊び・そうじ・ランチ等の活動の他に，全校遠足・送る会を実施。2年目には活動の名称も決まり，それまでの多目的広場をフレンズ広場と命名し，子ども達の交流の拠点となった。9歳差の縦割り活動はとても有意義であった。

○　教科担任制…小中相互乗り入れの教科担任制を実施した。図工・音楽で一人の教員が全学年担当をしていることで，特色新たなカリキュラムを編成できるよさがある。平成22年度は図工で，同じテーマでの全校絵画展を実施した。

○　異学年学習…少人数であったこともあり生活科・音楽・図工・家庭科等で実施。教え合う・学び合う・高め合う場を構成していった。規模が大きくなるにつれて課題も出てきたこともあり，実践は少なくなっていった。

○　外国語学習（中国語・英語）…全学年で週1時間実施。講師選びで苦労したが，大まかな形はできた。2年目，中学部は英語活動を充実させるために中国語は選択とした。

○　交流活動…3年間で多くの学校と交流することができ，お互いのよさを理解することができた。

○　体験・見学学習…全校活動のほか，各学年での校外学習・修学旅行等を実施。中学部は1年でホームスティ，2年で職場体験を実施。

○　保護者の参画…開校時の５月にはＰＴＡ準備委員会が発足，秋にはＰＴＡ総会を開催することができた。ＰＴＡランチをはじめ，子ども達のために独自の活動を実施（秋祭り・写真販売・体操服販売等）。バス会は４月に準備委員会を発足し，６月には運行開始できた。１年目は１台，２年目は2台，３年目は４台まで増え，運営・集金・交渉等を自主的に進めてくれた。

保護者ボランティアも１年目から発足し，読み聞かせ・図書整理・小学部低学年児童の下校時刻調整のための時間（フリータイム）の運営指導も行ってくれた。３年目はフリータイムの年間カリキュラムもでき，４月から７月は千羽鶴づくり，９月から11月には秋祭り用の神輿作り，12月から２月に音楽遊びを行い，２月に発表会を行った。学校創りに保護者も参画をしてくれた成果である。

ＰＴＡランチ
年３回のカレーランチ

(6) それらを支えるシステム作り

現地理解をもとに，交流活動をはじめとする特色ある教育活動を実践してきた。それらを支えるシステムも試行錯誤の連続で毎年のように改善を図ってきた。

○　学校２学期制への移行　　「地域の実態にあった教育課程」

開校年度は中国国内他の日本人学校にならい，３学期制を実施した。半年を終了した時点で，次年度は２学期制移行に向け準備をした。変更理由は３学期中に約10日間の春節休みが入ること，また修了式の時期が早いことなどから，３学期の授業日数が極端に少なくなり，十分な教育活動を経た評価が難しくなるというデメリット等であった。まず職員の共通理解を図り，ＰＴＡ役員への説明，さらに全保護者に文書で理解を求めた。保護者の関心は２学期制になると成績配布の回数が減り，学習状況が分からないということである。そこで夏休み・冬休みの長期休業前には個人面談を行うこと，学習状況がわかる資料を配布することにした。学校経営上も教育課程にゆとりをもつことができた。

○　教育計画づくり　　「１年間の計画は３月に」

１年目は基本となる形をつくるので精いっぱいだった。２年目の実践では今後さらなる見通しをもって教育活動が実践できるようにと考え，年度内の各行事が終わった段階ですぐに次年度の計画を立て，集約するようにした。その結果３月には，次年度の教育活動の原案が完成していた。３月中に１年間の内容について集中して職員会議で協議した。このことで１年間の見通しをもって教育活動が実践できること，各月の職員会議は変更点のみの提案で時間短縮を図れることを狙っていった。効果的に活用することができず二度手間になることもあったが，教育計画が１冊あれば年間の内容は理解できる。分からないときは教育計画に戻る。そのような形をつくることができた。

その他にも購入会計システムは在外ならでは会計システムを作ったり，子ども達の思い出を残すイヤーブック（全校児童生徒のアルバム）を作成したりした。３年目には日本人商工会との連携も強化され，在住の日本人子女対象の行事として親子スポーツ大会・餅つき大会を実施した。また日本人学校関係者以外の方に向けて，学校見学会（オープンデー）や教育相談会も実施することができたのも大きな成果であった。

３．おわりに

振り返ってみると本当にあっという間の３年間だった。「校長先生，カーテンの色は何色にしますか」という質問

から始まり，職員・児童生徒・保護者そして地域の方が一丸となって手作りで学校づくりを進め，ある程度の形になったことをうれしく思っている。まさに学校創りに大勢の方が参画してくださった成果として深圳日本人学校ができたと考えている。

派遣された3年間で，日本のすばらしさ・日本の教育のすばらしさ，教育のレベルの高さを改めて感じたことも大きな成果である。残された3年間，今回学んだことを現場に生かしていくことで，お礼にできればと考えている。

この場をお借りして，支えてくださった多くの方に御礼申し上げます。最後に本校の校歌は大黒摩季さんの作詞作曲である。大黒さんが中国に住んでいるみんなに応援歌として創ってくださった。なお子どもたちの歌声は，深圳日本人学校のホームページで聞くことができる。